

東京学芸大学竹早地区附属学校園
(附属幼稚園竹早園舎・竹早小学校・竹早中学校)

研究主題：未来を切り拓く子どもの主体性が活きる学び (未来の学校みんなで創ろう。PROJECT)

1. はじめに

竹早地区幼小中連携教育研究は、1986（昭和 61）年の発足から、実に 30 年以上の歴史を誇る。その歩みは大きく 9 期に分けることができ、第 6 期までは主体性の育成を目標とした幼小中連携カリキュラム（以下、連携カリキュラム）の創造とその検証の研究を進めてきた（第 6 期までの研究の歩み及び各期の概要は、東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎・東京学芸大学附属竹早小学校・東京学芸大学附属竹早中学校¹⁾を参照されたい）。第 7 期では、創造した連携カリキュラムを前提として、その実践において、子どもが学びを深めるために、どのように「学びを深める場」をつくるかを追究してきた²⁾。そして第 9 期研究では、昨年度までの第 8 期研究を継続し、東京学芸大学主導の産官学連携プロジェクト「未来の学校 みんなで創ろう。プロジェクト」の一環の研究「未来を切り拓く子どもの主体性が活きる学び」に取り組んでいる。このプロジェクトの目的は、未来の学校の姿を具現化するために学校、企業、教育委員会等が連携し、共通のプロジェクト・ビジョン「好きに、挑む」ことができる未来の学校モデルを開発することである。本研究は、このようなプロジェクトの実証を行う役割を担っている。

2. 「未来の学校みんなで創ろう。PROJECT」

(1) プロジェクトの概要

本プロジェクトは、テクノロジーの急速な発展に伴う予測困難な時代の到来を目の前に、人間の生き方や価値自体が問われる中で、学校がこれまで担ってきた役割やシステムも変化していかなければならないという問題意識のもと、国立大学法人東京学芸大学が 2020 年 8 月 5 日に「教員」「企業」「教育委員会」がワンチームとなって、Society5.0 に向けた新しい学校システム作りに挑戦していく「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」が基盤となっている。このプロジェクトでは、竹早地区を研究拠点として、竹早地区の教員と本プロジェクトに関わる連携企業、各教育委員会と東京学芸大学が「共創」していきながら未来の学校像を構想し、実証研究を進めていくことにある。プロジェクトの推進に当たっては、竹早地区の幼小中連携研究委員会（研究部）と本学に設立された「教育インキュベーションセンター」、本学と Mistletoe Japan 合同会社（ファウンダー：孫泰蔵）が共同設立した「一般社団法人東京学芸大 Explayground 推進機構」が核となって進めている。

(2) プロジェクト・ビジョン「好きに、挑む」

本プロジェクトを推進するにあたり、プロジェクト・ビジョンとして「好きに、挑む」を設定した。この設定にあたって、竹早地区の教員、連携企業等が共にこのプロジェクトを通して何をしていきたいかの議論を重ねていく中で、「①我々は、これからの時代『生きることは面白い』感じ、自分に素直になって、自分や社会をよりよくする方向へ向かっていくことが大切だと考えていること」「②溢れるアイデアや意欲を礎に、考え、そして行動できる事が重要に

なると考えてること」が明らかになった。そこで、そのような学校を創るための本プロジェクトのビジョンとして、「好きに、挑む。」を掲げることとした。この言葉の中には、「『答え』より『好き』を見つけられる学校」「子どもと一緒に教員自身も、それぞれの「好き」に挑んでいくこと」「夢中で「好き」に挑むその熱量は、誰かの心を動かし、社会を大きく動かす原動力になると信じていること」「既存の構造であった、教員が教え、子どもが教わるだけというものではなく、みんなで一緒に「好き」に挑んでいくことで、お互いに学びあうことができる創発の場としての学校であること」等を含んでいる。また、「好きに、挑む。」が実現した学校は、未来を切り拓く場となっていき、教員も「やりがい」と充実感の中でさらに輝けるのではないかという理想を描きながらプロジェクトを推進していく思いを込めて、プロジェクト・ビジョン「好きに、挑む」を設定するに至った。

3. 本研究の目的と方法

(1) 研究の目的

上記のプロジェクトを受け、第9期研究の目的は、「未来を切り拓く子どもの主体性が活きる学び」の研究成果の発表である。この目的のため、保育や授業に限らず、学校のシステムや環境、教員の業務等、学校に関わるすべてを視野に入れ、未来を切り拓く子どもの主体性及びそれに関わる力を育むことを目指した実践研究を構想する。こうした研究対象の幅広さは本研究の特徴の一つであり、竹早幼稚園、小学校、中学校の伝統と文化、これまでの竹早地区幼小中連携教育研究の確かな礎の上に創っていくことができるものである。

(2) 研究の方法

研究の方法は、実践に基づく実証的考察が中心である。ここでの「実践」は、本研究の対象の広さが示唆するように、授業に限ったものではない。授業外での子どもの活動や教員の活動等を含む学校活動全般も意味している。こうした意味での「実践」を通して、開発した授業や学校環境、システムの有効性を実証的に検討することが本研究の主たる方法である。

4. 研究の体制

(1) 竹早地区の研究体制

今年度の研究体制は、「未来の学校を創る」ことを究極の目的とし、主体性及びそれに関わる何らかの力を子どもに育む実践を中心とした研究である。これは、「未来の学校を創る」というテーマに対し、実践を前面に出したアプローチであり、実践の手立てとしてこれまでのICTやサードパーソン、ポートフォリオなどの未来の学校の研究成果を生かし、検証、深化発展をさせようとするものである。こうした内容を想定した場合、それに取り組む体制は、大きく3つの部会で構成されたものが考えられる(図1)。教科領域による実践研究を担う「実践研究部会」、実践の基盤となる理論をつくる「理論研究部会」、そしてこれまでの未来の学校の研究をどのように発展させていくかを検討する「共創部会」である。「理論研究部会」は、竹早地区の「主体性」の見直しや新しいキーワードを取り入れる場合にはそれについて検討することを行い、「共創部会」は、これまでの研究内容のどれに焦点をあて、どのような実践を行い、深めるのか、その計画と結果のまとめを行う。

今年度の共創部会の研究チームは、昨年度の9チームを再構成した3つの分科会で構成される。「社会との共創分科会」では学校を実社会との共創の場としてとらえ返し、未来の社会を創造して子どもの「学び」のあり方に抜本的な改革をしていくことを目指している。「個別最

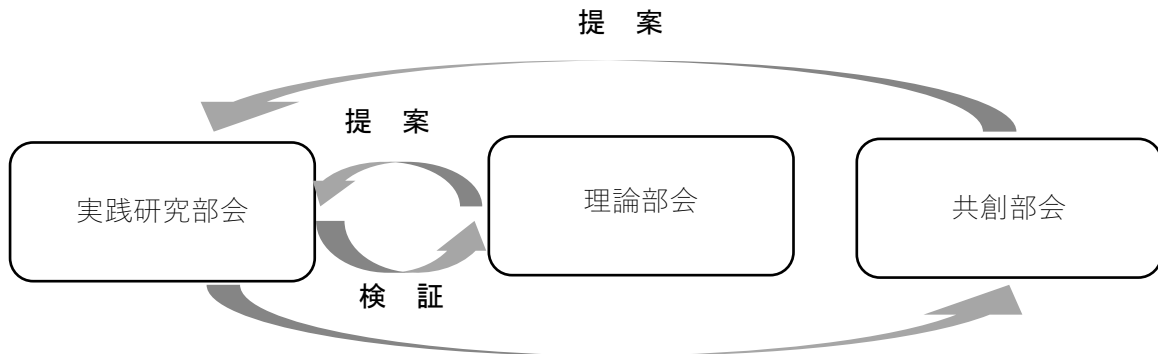


図1 3つの部会の関係図

適化分科会」では、学校の中で子どもの「学び」を支える最も大きな仕組みは「授業」であり、日々変化を遂げる現代の社会の状況に応じた新しい学校環境や子どもの状況に応じて、「授業」も大きく変化していくものである。それは単に教員の意識の変化だけではなく、様々なテクノロジーや機材を活用した個別最適な「学び」へのアプローチを模索しその価値を検証することを目指している。「教育のDX化分科会」では、VR やICT 等の新しい技術を取り入れた学習環境の構築とその授業実践の開発に取り組んでいる。

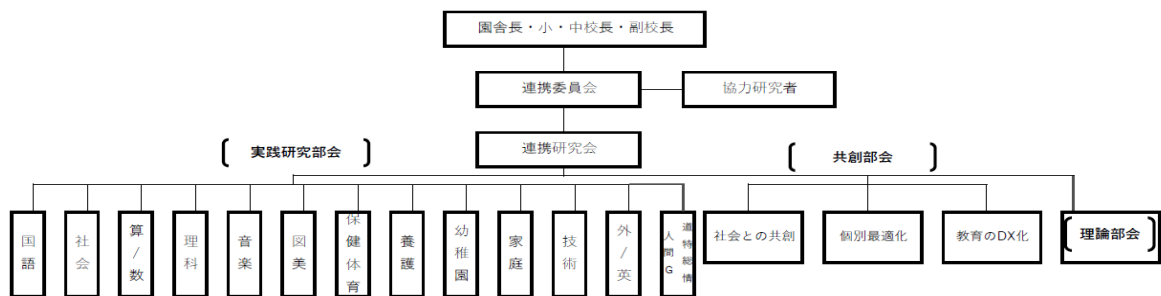


図2 2023年度研究体制

(2) 外部との連携と環境整備

学校現場における子どもの「学び」や教師の「授業」は、その営みそのものが実は多くのステークホルダー（子ども、保護者、地域住民、企業、教員、大学研究者等）が参加しお互いに支え合い影響を及ぼしあって成り立っている。これからの未来の学校には教員とは異なる職種の方との共創により、教員では思いつかないようなアイデアが生みだされ、活用できる知識や技術を広げ、多面的・多角的な研究、実践を可能にしていくものといえる。こうした意味において、外部との共創は、子どもの「学び」はもちろん、教師の「学び」を支える学校体制として期待できるし、不可欠なものになるであろう。本研究は、このような外部連携を幹として、子どもが学ぶ場を創る環境整備も含めて着手し、未来の学校の姿を示すものである。

5. 研究の経過

(1) これまでの取り組み

昨年度の成果は、試行錯誤を繰り返しながらも第8期研究の基盤をつくり、研究を軌道に乗せられたことである。そして課題は、議論を通して固めてきた各チームの研究構想を具体化、実践し、開発した教材や学校環境、学校システムをさらに検証することである。

(2) 今年度の取り組み

昨年度の課題を受け、今年度は、大学や企業と協働して進めるチームの研究活動を継続し、新たな教育課題への取り組みや竹早地区における主体性のあり方を未来の学校を創るために必要な力を抽出していくことを目的に各チームの研究報告を参照されたい。ここでは、全体に関わって取り組んできたことについて報告する。

①未来の主体性とは

竹早地区ではこれまで幼小中連携教育に軸として「主体性」をいかに育むのかその手立て明らかにしてきた。そもそも連携研究の発端は、平成13(2001)年度年に、学長からの指示で竹早地区としての中・長期計画の一環としての幼小中連携が動きはじめた。活動当初はそれぞれの校種間で保育・活動・授業の進め方について意見の隔たりがあったが、互いに授業を見せ合いながら歩み寄り、議論を重ねながら、幼小中でそれぞれの教育観を出し合っすり合わせを行った結果、無理の生じない、それぞれの校種の教育観に矛盾しないテーマとして「主体性」という柱を立てることになった。この主体性という言葉は本来多義的な意味を含んでおり、「私」が何かをしたり表現したりする自己発揮・自己表現を意欲的に取り組む「個」の側面と、「私たち」が仲間とともに何かを成し遂げたり協力したりする「集団」の側面の両方が入り混じっている。この点を踏まえて竹早地区の研究の根幹となる主体性の定

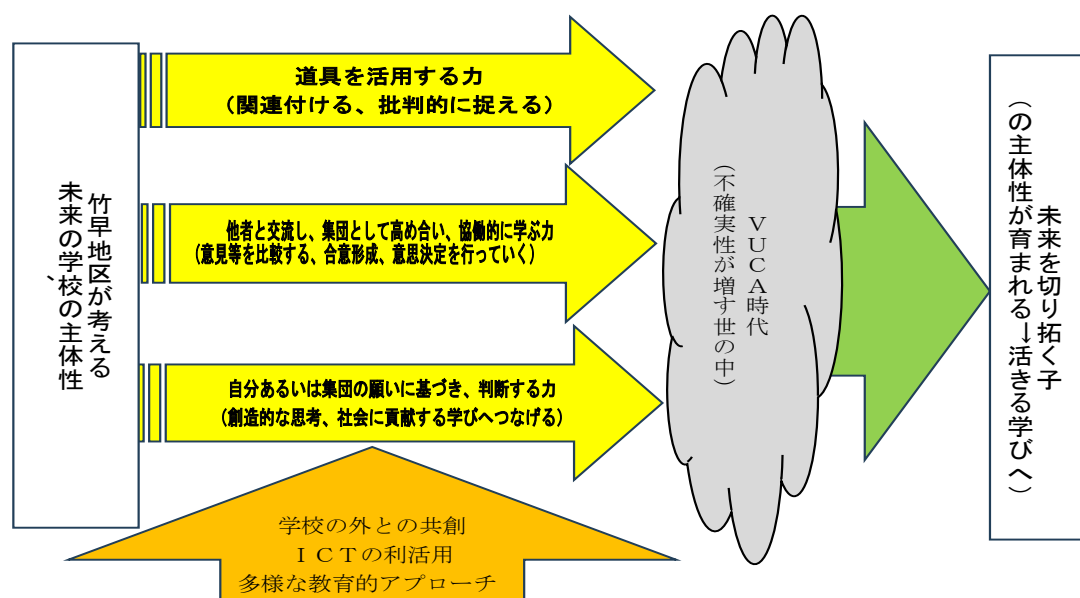


図3 主体性をとらえる3つの力

義を「子どもがよりよく生きるために、自分(あるいは集団)の願いに基づき、自らの意思・判断で行動しようとする姿勢や態度」とした。これまで教育実践で大事にしてきたものを「主体性」という観点で価値づけていくことで、幼・小にとっては、「よりよく生きる」(自己実現)の文脈で「主体性」が重視され、中学では自己教育力や自ら発信する、という文脈で「主

体性」が重視されていた。

②主体性をとらえる視点

今年度からの研究テーマは、「未来を切り開く子どもの主体性」であることから、これまで取り組んできた「主体性」の議論を踏まえて、「未来を切り開く」という側面から研究を推進していく必要がある。そこで、2019年の研究「学びを深める場を作る」において取り組んだ研究をもとに、「未来の学校みんなで創ろうプロジェクト」の研究成果も踏まえ、主体性をとらえる3つの力として整理し³⁾、これを教科領域の主体性をとらえる視点としていくことにした。(図3)この3つの力については各教科領域の目標や育てたい子ども像に照らしてより詳細な内容が示されることになる。例えば国語・社会においては、教科の特色から3つの力の内実をより具体的に明示して、教科の特殊性を生かした学びを実践しようとしている。

教科領域	(知識, 技能, 考え方, 情報等の)道具を活用する力	他者と交流し, 集団として高め合い, 協働的に学ぶ力	自分あるいは集団の願いに基づき, 判断する力
国語	表現方法や叙述の工夫に気づき, その良さを味わうとともに, 書き手の意図に迫ることができる。	仲間の意見をきき, その良いところを進んで活かそうとする。	新たな気づきや学びを喜び, 既存の知識と照らし合わせながら, その価値を見出そうとする。
社会	既存の知識や経験に基づいて生かして, 情報を批判的に検討した上で活用している。	多様な立場からの見方・考え方を尊重し, 柔軟に取り入れ, 価値判断や意思決定をしている。	自分が生活する社会の姿を多角的に理解しながら, よりよい社会のあり方を追究しようとしている。
各教科領域に記載されていることの共通項	<ul style="list-style-type: none"> ・(日常や既習事項, 先行概念と)関連づけること ・批判的に捉えること 	<ul style="list-style-type: none"> ・比較すること ・合意形成, 意思決定を行っていくこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの考えに基づく創造的な思考を行うこと ・生活や社会に貢献する学びへつなげること

6. 今後の展望

今年度の研究成果は、竹早地区で考える「未来の学校の主体性」≡「未来を切り開く子の主体性」を、3つの力として各教科領域を超えて共通した内容に取り組むことで育まれるものと仮定して研究を推進したことである。その際、今回の研究では「共創」ICT等の利活用「多様な教育的アプローチ」から各共創部会で骨子を、各教科領域部会で実践案を検討し、公開研究会で保育・活動・授業を提案した。一方、外部との環境整備の面では「外部との関わり」も意識した研究を考えていくことの重要性を、改めて強く認識させられる機会となった。今後の課題は、今年度の成果をもとにさらに研究を進めていくとともに、研究の進捗から見えてきた新たな課題を踏まえて研究を柔軟に展開していくことである。

(引用文献)

- 1) 東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎・東京学芸大学附属竹早小学校・東京学芸大学附属竹早中学校『子どもが輝く－幼小中連携の教育が教えてくれたこと』, 2018.
- 2) 東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校. 2020年度研究紀要「学びを深める場をつくる 最終年次」, 2020.
- 3) 東京学芸大学附属学校紀要 第41集「竹早地区幼小中連携研究における主体性の定義の再考」, 2016.